

1986年 7月15日(火)～ 9月21日(日)

●寄贈品コーナー

鳥海青児と素描

鳥海青児(ちょうかいせいじ)は、1902年(明治35年)平塚市須賀(当時は中郡須馬村須賀)に生れ、日本の近現代絵画史に大きな足跡を残した著名な画家である。本名は鳥海正夫(とりうみまさお)といい、20歳の時に鳥海青児と名のり、全生涯の作品のサインにはTyokaiと記している。今回の陳列では、所蔵する作品のうち素描を16点、前期後期に分けて紹介する。

鳥海の素描作品には、国内外での取材旅行先でのスケッチ、あるいはそれをもとにしたエスキース、エチュードなど分類することができるが、作者が語っているように、油絵の作品へ展開させてゆく作業はアトリエでほとんどがなされたことから、現地でのスケッチが大変重要な意味をもっていると言える。ここで素描について考えてみよう。

素描とは、芸術家の創作行為の過程で生みだされる黒や茶などの単色の線を主体に表現されたもので、フランス語でいうデッサンにあたる。それぞれの作家が、どの様な目的、意図によって描くかによって様相を異にするのであるが、大体次の通りに分ける。

1 クロッキー(仏)、スケッチ(英)

対象の造形的特徴を適確に写生する。従って旅行や野外での時間に制約された中で、その場で素速く写生するため、直観的な生な感動が表現され

る特徴がある。クロッキーは特に動物等の動きの速いものを対象にする略画とも言える。スケッチは、静物や風景等がある程度時間をかけたり、細密な描写で対象の記録に重点を置く傾向である。

2 エスキース(仏)、エチュード(仏)、下絵下図

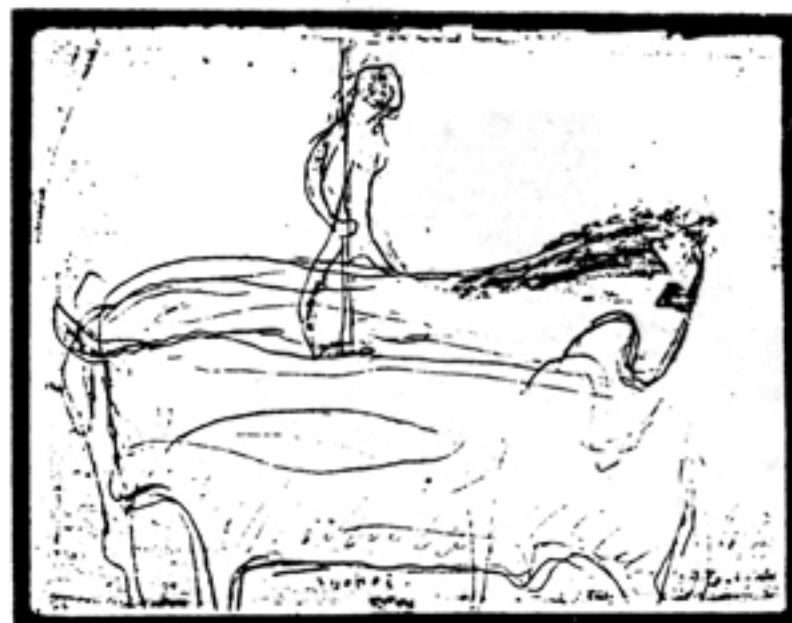
これらに共通する概念は、創作活動の過程で、クロッキーやスケッチ等をもとに、イメージの展開をはかり最終の作品としての形へ抽象化するための作業として生れるデッサンである。エスキースは完成予定の作品の1歩手前の下絵であり、エチュードは習作、とくにエスキースの部分詳細図というもの。日本画における下絵がエスキース、下図がエチュードに相当する。

鳥海青児の素描は、小さなスケッチブックに描かれたクロッキーとしての風景や動物、それと遺跡やピカドール(闘牛の脇役で槍を持ち馬にまたがり登場する人物)に見られるエスキースが盛んに試みられ、それぞれの油彩画作品(タブロー)に連がってゆくプロセスが明らかになり、大変興味深いものがある。ベニス、ピカドール、シベリアの駅等に見られるクロッキーは、特にこの作家のデッサン力の鋭い力を十分に味わうことができよう。

(森田)



ピカドール(クロッキー)



ピカドール(エスキース)

寄贈品コーナー

通算回数	期 間	テ ー マ	展 示 資 料	点数
84	61年7月15日 ～9月21日	鳥海青児デッサン展	北海道風景・シベリア駅路の雪・ベニス・ベルリン・アルジェリア・闘牛・ピカドール・埴輪・アッシジ他	16

●「鳥海青児素描作品展」

平塚出身の油採画家、鳥海青児の優れた素描・水彩16点を紹介します。油彩画に完成されていた作品に連がる貴重な作品等が含まれています。前期、後期に分け展示します。

前期 7月15日(火)から8月19日(火)

後期 8月20日(水)から9月20日(土)

前期出品作品

後期出品作品

- | | |
|-----------|-------------|
| 1 北海道風景 | 1 ベルリン |
| 2 シベリアの駅 | 2 アルジェリア |
| 3 ベニス | 3 漢 口 |
| 4 ピカドール | 4 うずくまる |
| 5 ピカドール | 5 ルカの寺院 |
| 6 天 壇 | 6 アッシジ |
| 7 埴 輪 | 7 闘 牛 |
| 8 アッシジの寺院 | 8 エレハンタの石窟像 |

会場：寄贈品コーナー(1階)